

## VI まとめ

### 〈成果〉

- 研修主題「自ら学び、確かな学力を身に付けた児童の育成」に向けて、教科の特性や児童の実態に応じ、課題解決的な学習の過程において、どのように交流活動を取り入れるとよいか授業実践を通して検証を進めてきた。児童の実態から身につけさせたい力を設定して交流活動の具体的な手立てを考え、各学年で数多くの実践をしてきたことで、児童の実態や学習内容に合った交流活動の仕方を探ることができた。
- 課題解決的な学習の過程でどのように交流活動を取り入れればよいか、実践を通して検証を進めてきた。今年度は、〈導入〉〈追究〉〈まとめ〉のそれぞれの場面で交流活動を取り入れてきたが、主に〈追究〉〈まとめ〉の場面で取り入れることが多かった。どの場面においても交流活動を取り入れるときには、教師がしっかりねらいをもつことが大切であることがわかった。また、交流活動をパターン化することで、児童が見通しをもって学習活動に取り組むことができた。
  - ・〈導入〉の場面では、児童が課題意識がもてるように、また、課題を共通理解するために交流活動を取り入れた。この場面での交流で、児童が課題をしっかり把握でき、その後の学習活動がわかりやすくなり、学習意欲の向上にもつながるだろう。
  - ・〈追究〉の場面では、ペア、グループ、全体など様々な交流活動を取り入れた。児童が自分の考えをしっかりとって交流することで、自分の考えを進んで話すことができ、考えを広げることができた。
  - ・〈まとめ〉の場面では、児童の考えを深めるために、教師中心に進めることが多かった。児童が友だちの多様な考えを知ったり、考えを練り上げたりするのに効果的であることがわかった。
- 各研究部から
  - ・〈授業研究部〉では、効果的な交流活動のあり方について実践を元に、どの場面で、どのような交流活動を取り入れるか検証することで、よりよい交流活動の仕方を推進してきた。学年ごとに効果的な交流活動を課題解決学習の仕方を進めることができた。
  - ・〈調査研究部〉では、児童の交流活動に対する意識調査を実施して分析したことで、本校の多くの児童に交流活動への苦手意識があることがわかった。この結果を生かして、交流活動の形態や場の設定を工夫するなどの具体的な手立てを考えたことは、児童が意欲的に交流活動を行うのに非常に有効であった。また、QUや学力テストを分析して児童の実態を把握し、交流活動の場の設定に生かすことができた。
  - ・〈学習環境支援部〉では、昨年度から継続して「家庭学習の仕方」を活用して、児童と全家庭に向けて、積極的に家庭学習を進めてきた。今年度は更に、各学年に応じた家庭学習の時間を見直した。また、学校でも「リレー自主学习ノート」や「家庭学習カード」、「一人一冊自主勉ノート」など、各学年の取り組みを共有し、児童の学習意欲を喚起できるように工夫してきた。
- 学力向上対策と連携した研修の一環として、昨年度より漢字・計算コンテストを継続してきた。児童のコンテストへの意識が高まり、漢字力・計算力が身に付いてきており、学力向上につながったと考える。
- 全体研修会の持ち方を工夫したことで、職員間の意見交流が活発になり、よりよい実践を探るヒントとなった。また、全職員で共通理解を図りながら研修に取り組むことができた。

### 〈課題〉

- 交流活動を通して、友だちの考えにふれることで自分の考えを「広げる」ことはできたが、そこからもう一度自分の考えを振り返り、考えを「深める」ことは難しかった。児童が自分の考えを「深める」には、どのような手立てを講じればよいか、交流活動のあり方を更に探っていく必要がある。また、児童がどう交流活動に取り組めばよいのか、目安となる視点を与えると活発に取り組めるだろう。
- 児童の家庭環境が様々であることから、児童の家庭学習への取り組みに差が見られるので、今後も「家庭学習の仕方」を活用し、全校で家庭学習の推進に力を入れていく必要がある。
- 朝学習の時間を活用して、基礎・基本の定着が図れるような学習を取り入れたい。
- 学年での実践を、各ブロックや各研究部が支援していけるような研修体制を確立することで、更に校内研修が効率的に推進できるだろう。
- 今年度、職員の英語力UPを目指した研修がなかなか実践できなかったので、次年度は年度当初から計画的に研修に取り入れていきたい。